

稲作情報

No.6

TEL:018-860-3410

FAX:018-860-3834

生育早まる！適期追肥と間断かん水で稲体活力の維持を！

1 気象経過と生育状況

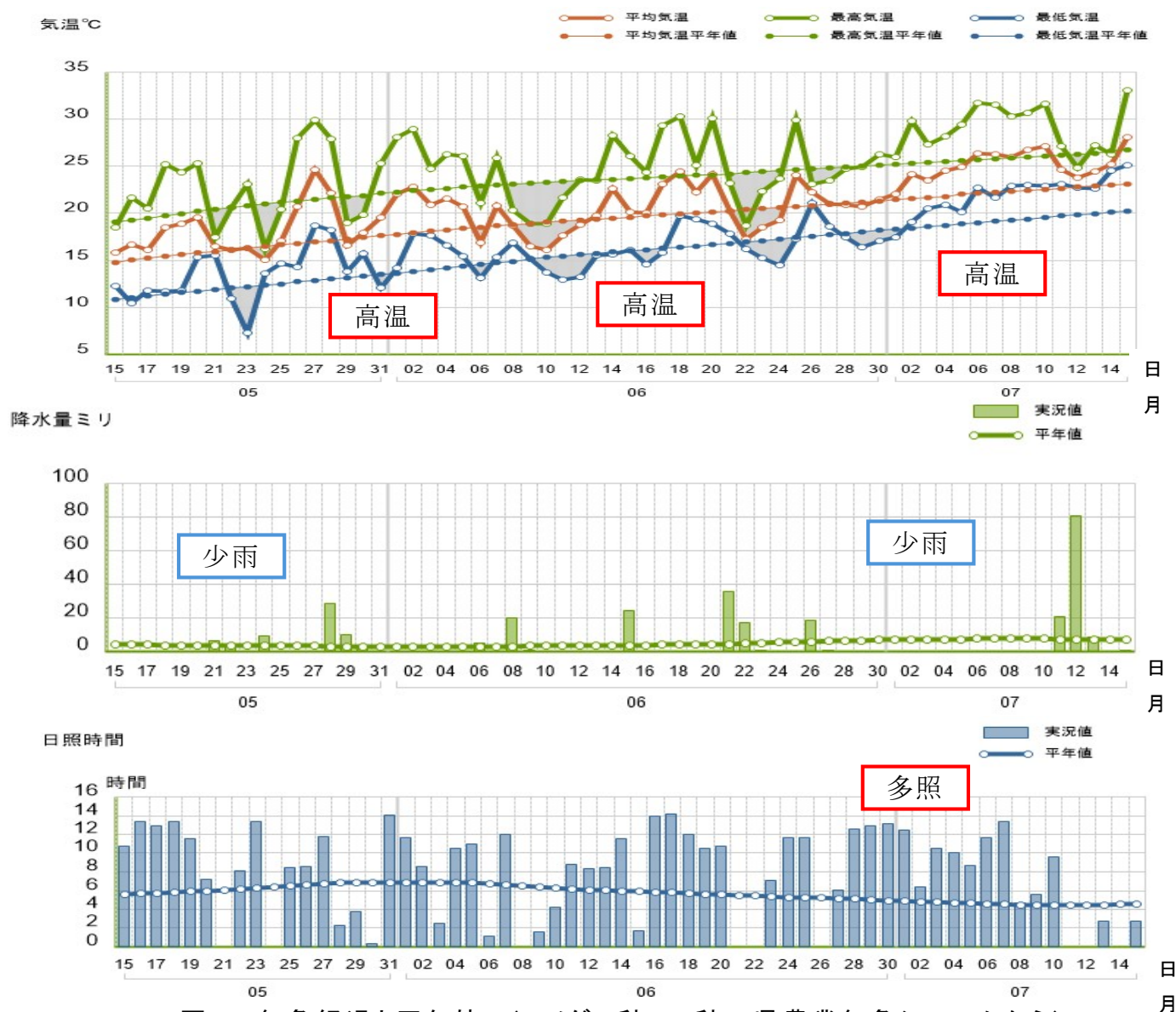


図1 気象経過と平年値（アメダス秋田、秋田県農業気象システムから）

〈概況〉

7月15日の定点調査結果（あきたこまち）は、草丈は68.3cm（平年比100%）で平年並、茎数は543本/m²（平年比115%）、葉数は12.2葉（平年差+0.7葉）といずれも多く、葉色（SPAD）は38.3（平年比92%）と低い状況でした。

調査ほ場では、概ね幼穂形成期を過ぎており、すでに減数分裂期に達しているほ場もあるなど生育は前進しています。各ほ場の生育ステージ（幼穂長や出葉状況）に合わせた栽培管理を徹底してください。

表1 水稻定点調査結果（7月15日実施）

	本年	比較	
		平年比・差	前年比・差
草丈	68.3cm	100%	92%
茎数	543本/m ²	115%	117%
葉数	12.2葉	+0.7葉	+0.3葉
葉色（SPAD）	38.3	92%	94%

※ 管内定点ほ場10地点（あきたこまち）の平均値

2 肥培管理

●栄養診断による幼穂形成期・減数分裂期追肥の判断(品種:あきたこまち)

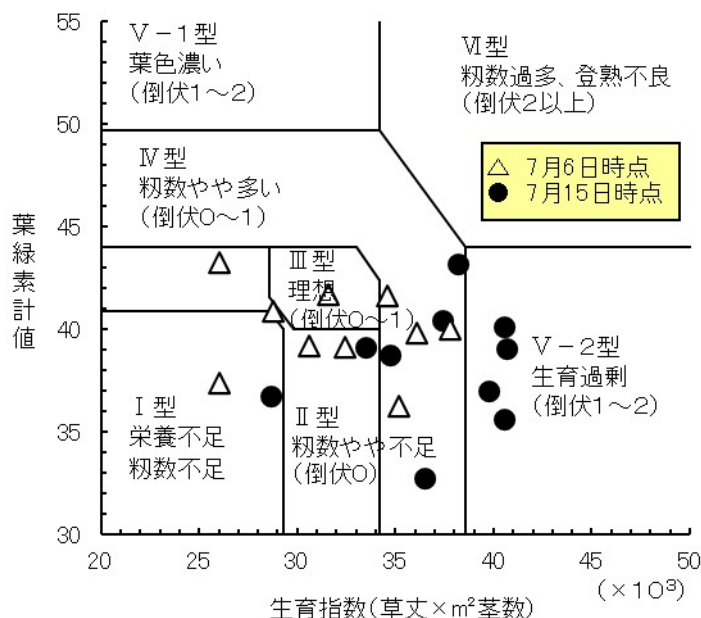
- ① 幼穂形成期(幼穂長2mm)を過ぎているほ場が多いため、速やかに生育・栄養診断を実施してください。
- ② 診断結果を基に、倒伏に注意しながら葉色の急激な低下を招かないよう適切な追肥を実施します。
- ③ 幼穂形成期の生育型がⅥ型に該当する場合は、緊急処置として倒伏軽減剤の使用を検討します。肥効調節型肥料を基肥などで使用した場合、追肥は施用済みの窒素成分量などを考慮し、慎重に判断します。

※幼穂形成期を過ぎているほ場が多く、生育量が大きい状況ですが、幼穂形成期には栄養診断を実施して追肥の量と時期を判断しましょう。

※定点調査ほ場の生育栄養診断では、7月15日現在で幼穂形成期を過ぎているほ場が多かったことも影響し、Ⅳ型、Ⅴ-2型が多くなっています。

※本年は茎数が多く、今後も高温傾向が続く予報であることから、地力の低いほ場等では葉色の低下に注意が必要です。

※高温下では、稲体の消耗が激しく、白未熟粒(乳白粒など)が発生しやすくなります。減数分裂期に適切な追肥を行い、出穂前の葉色を高く維持することが重要になります。ただし、過剰な追肥や時期の遅れは倒伏や食味低下(玄米タンパク質含有率の増加)を招くため、以下の生育型(栄養診断)に基づいて判断します。



幼穂形成期における栄養診断(中央)

生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I 型	2kg	2kg
II 型	2kg	2kg
III 型	ムラ直し1kg	2kg
IV 型	なし	2kg
V-1 型	なし	ムラ直し1kg
V-2 型	なし	ムラ直し1kg
VI 型	なし	なし

注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

表2 幼穂形成期(7月15日頃)と減数分裂期(7月25日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(県中央地域、稲作指導指針より)

幼穂形成期	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数	葉色(SPAD)	生育指数 ^{※1} (×10 ³)	栄養診断値 ^{※2} (×10 ⁵)
理想値	61	515	10.7	42	31.4	13.2
上限値	63	559	10.9	44	34.2	14.5
下限値	58	471	10.5	40	28.6	11.9
減数分裂期	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数	葉色(SPAD)	生育指数 ^{※1} (×10 ³)	栄養診断値 ^{※2} (×10 ⁵)
理想値	70	491	11.9	38	34.4	13.1
上限値	72	527	12.2	39	37.0	14.2
下限値	69	456	11.7	36	32.2	11.9

注) 生育指数は草丈×茎数、栄養診断値は草丈×茎数×葉色(SPAD)で算出

表3 アメダスデータを用いた「あきたこまち」の出穂期予測 ※出穂期：ほ場全体の4～5割が出穂。

地点	秋田		男鹿		五城目		大潟		岩見三内		大正寺	
田植え日	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差
5月15日	7月27日	早5日	8月2日	早4日	7月30日	早5日	7月31日	早5日	8月1日	早4日	8月1日	早5日
5月20日	7月30日	早4日	8月5日	早3日	8月2日	早4日	8月3日	早4日	8月4日	早3日	8月4日	早4日
5月25日	8月1日	早5日	8月7日	早4日	8月5日	早4日	8月5日	早5日	8月6日	早4日	8月6日	早4日
5月30日	8月5日	早4日	8月10日	早3日	8月8日	早3日	8月9日	早3日	8月9日	早3日	8月10日	早3日

注) あきたこまち中苗移植、田植え翌日から7月16日まで各アメダス地点の平均気温実測値、それ以降は平年値を用いて推定。今後の天候によって予測日は前後する。平年差は田植えからの平均気温が平年値で経過した場合の出穂期予測との差。

●7月16日時点の予測では、あきたこまちの出穂期は3～5日程度早まる見込みです。

3 今後の水管理

- ① 幼穂形成期から出穂までは、稲体の活力維持のため間断かん水が基本となります。中干しが十分に実施できなかったほ場では、落水期間が長めの間断かん水を実施し、田面の硬度を確保します。
- ② 減数分裂期は出穂の10～12日前頃で、この時期は低温に弱い時期なので、日平均気温20℃以下(最低気温17℃以下)の低温が予想される場合は、深水管理(水深15cm以上に保つ)を行い、幼穂を保護します。

4 病害虫防除対策 ～出穂が早まるため、遅れずに実施しましょう～

- ① **葉いもち(発生量：平年並、発生時期：やや早い)**
 - ・ 6月22～23日及び7月3日にいもち病の全県的な感染好適条件や準感染好適条件が観測されたほか、病斑増加状況調査等の結果から、全県の全般発生開始期は7月10日頃と平年よりやや遅くなりました。
 - ・ 一部ほ場で水田内の葉色が濃い箇所を中心に葉いもちの発生が確認されています。このため、ほ場を巡回し本田での発病状況を確認してください。
 - ・ 葉いもちの発生ほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン剤またはノンプラス剤)で防除を実施してください。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布しましょう。
- ② **紋枯病(発生量：多い、発生時期：やや早い)**
 - ・ 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかで防除しましょう。その際、薬剤が株元に到達するように散布してください。
 - ・ 粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使用していないほ場に限り使用します。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前です。
 - ・ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れないでください。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしないでください。
- ③ **斑点米カメムシ類(発生量：やや多い、発生時期：早い)**
 - ・ 水田内にホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエが多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されます。発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な中・後期除草剤を選択し、雑草防除を徹底しましょう。
 - ・ 稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に数回行いましょう。

表4 斑点米カメムシ類の本田防除と草刈り時期

	6月	7月			8月			9月		
	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
本田防除					1回目防除 ↔ 出穂期10日後頃		2回目防除※ ↔ 出穂期24日後頃			
農道・畦畔	←→					草刈り			←→	
法面・休耕田	←→ 草刈りの徹底			草刈り禁止				←→ 草刈りの徹底		

出穂15～10日前までに数回行う。水田内のイネ科、カヤツリグサ科雑草の穂はアカスジカスミカメの発生を助長するため除草対策を徹底する。

1回目の茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努める。

稲の収穫2週間前以降から草刈りを実施する。

注) 出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場やイネ科雑草が主体の牧草地・休耕田等に隣接するほ場、発生予察情報に基づき多発が予想される場合は出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を必ず実施する。 **※本年は出穂期が早まると予測されるため、早めに草刈りを終了し、防除時期が遅れないよう注意しましょう。**

5 異常気象対策(高温、大雨)

① 高温対策について

- 7月16日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、**向こう1か月の気温は「高い」と見込まれます。**
- 出穂当初は水を多く必要とする時期のため、**特に出穂後10日間は土壤水分が不足しないよう注意してください。**
- 最高気温が30℃以上となる場合は、用水の確保が可能であれば、かけ流しを行います。**
かけ流しかん水が困難な場合は、落水期間の短い間断かん水や飽水管理(田面に水が染みる程度のかん水)を実施し、水分補給と地温の低下に務めてください。
- 落水時期は、出穂後30日以降としてください。**

② 大雨対策について

- 冠水・浸水した場合に速やかに排水されるよう、事前に排水溝や排水路の点検を行ってください。**
- 大雨により水路が増水している場合は、危険ですので絶対に近づかないでください。

6 熱中症対策

過去10年間の全国における農作業中の熱中症による死亡事故は、その8割が7～8月に集中しています。次の事項を参考に、熱中症対策を徹底してください。

① 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行いましょう。

- 特に70歳以上の方は、喉の渇きや気温の上昇を感じづらくなるので、高温時の作業は極力避けましょう。

② 作業前・作業中の水分補給、こまめな休憩をとりましょう。

③ 熱中症予防グッズを活用しましょう。

- 屋外では帽子、吸汗速乾性素材の衣服、屋内では送風機やスポットクーラーなどを活用しましょう。

④ 単独作業を避けましょう。

- 作業は2人以上で行うか、時間を決めて水分・塩分補給の声かけを行うなど、定期的に異常がないか確認し合うようにしましょう。

◇次号は7月27日頃の予定です。